人物で語る日本デンマーク

㉑ 高橋廣治 Ⅱ

一九二二年（大正一一年）、高橋廣治は、名古屋種の多産鶏を愛知県全域に広める五か年計画が挫折し、十五年間勤めてきた愛知県立農事試験場を三十七歳で退職した。その後、初生雛の販売を目的とする愛知家禽株式会社の顧問に迎えられ、その研究機関として知多郡大府町横根山に日本家禽研究所を開設した。そして、養鶏に関する研究をする一方、産卵・競進会や長期養鶏講習会を開催して、養鶏の技術の普及に全力を傾けた。

一九二五年（大正一四年）、横根山付近に小松林約二万坪を手に入れ、養鶏村を開いた。五百円の供託金で一戸につき山林八十アール、住宅、鶏舎、採卵用若鶏五百羽を貸し、入植後ただちに生活できるようにし、鶏糞を使い、やせた山林を耕地化する計画であった。入居者は全国から八人集まった。当時、鶏卵百匁（三百七十五グラム）は二十二銭ぐらいで、かなりの利益があった。しかし、物価は年々下落し、昭和五年になると鶏卵百匁が十銭に、昭和七年には五銭にまで下がり、まったく採算が取れなくなってしまった。一九三三年（昭和八年）、全財産を投げうって移住者や研究所の借財を整理し、養鶏村も閉鎖した。

廣治は、一九三〇年（昭和五年）、日本雌雄鑑別協会を設立し、初生雛の雌雄鑑別技術者の養成とその技術の普及にも力を入れた。また、戦争により飼料の輸入が途絶えると、さつまいもを利用した飼料の研究を進め『甘藷養鶏法』を著した。

戦後、廣治は大規模養鶏の確立に努め、養鶏の企業化の道を開いた。一九五五年（昭和三〇年）、七十歳になった廣治は、アメリカの養鶏を視察し、ケージ養鶏法をわが国に紹介した。そして『立体ケージ養鶏の実際』を出版すると同時に、自ら講演行脚したり、「日本家禽新報」という月刊新聞で指導したりして、その普及に努めた。さらに、屋外に杭を打ち、その上にケージを並べる青空養鶏が鶏の生理にかなった方法であり、有利であることを提唱し、その普及にも努力した。

青空養鶏を実践する高橋廣治

これまでの業績が認められ黄綬褒章に続き、一九六五年（昭和四〇年）には勲四等瑞宝章を授与された。廣治は、青空養鶏を海外へ普及させるため、一九七〇年（昭和四五年）、ブラジルで講演や実地指導を行い、ブラジル政府から産業功労賞を授与された。

養鶏王高橋廣治顕彰碑
（大府市北山町）

一九七三年（昭和四八年）、米寿を迎えた廣治は、財団法人山崎延吉先生頌徳会より表彰を受けた。「一介の農夫であった私を引き上げ、養鶏研究人として養成してくださった山崎先生のご恩に感謝しつつ、最後の研究として青空養鶏を完成するため努力している」と述べているが、廣治は、その生涯を養鶏の研究と普及、後進の指導に捧げ、山崎の目指した農業の近代化に尽力したと言えよう。

一九七五年（昭和五〇年）、養鶏の向上発展に寄与し顕著な業績をあげた者を表彰する目的で「高橋養鶏賞財団」が設立された。第一回高橋養鶏賞には、安城市東栄町の小西信次氏ほか二人が表彰を受けた。その後今日まで、毎年養鶏功労者の表彰を続けている。この間、安城市では東町の神谷正男氏、篠目町の野村高治氏が受賞している。

一九七九年（昭和五四年）、その生涯を養鶏に捧げた養鶏王高橋廣治は、九十四歳でこの世を去った。没後、従五位に叙せられた。

文　三上裕保